

新呑川の今と昔

今回の69号では、世田谷区から大田区を貫いて東京湾に注ぐ全長約14.4kmの二級河川である「呑川」の最下流である糀谷地区を流れる「新呑川」について、この身近な川の昔(江戸時代以降)から現在までの移り変わりを特集します。

なお、糀谷歴が長い方はご存じの方も多いと思いますが、東蒲中学校付近より下流が「新」呑川です。旧呑川は、東蒲中学校付近から昭和島の対岸にあたる呑川水門まで続いていましたが、現在は、川の流れる地形を活かした緑地として整備されています。新呑川ができる前は「藤兵衛零(とうべえみお)」と呼ばれる海苔舟などが利用していた水路が東糀谷5丁目付近の藤兵衛橋辺りまで存在していましたが、昭和16年に呑川から分岐して新呑川が誕生しました。

江戸時代の糀谷周辺の新呑川流域は、主に水田と湿地帯が広がり、海岸線は今より内陸に位置し、羽田道の東側周辺は萱野(茅の生えている野原)が広がっていました。
※羽田道とは、旧東海道(三原通り)の内川橋際から分岐し、大森東・南、東糀谷を十て羽田(弁天橋)に至る江戸時代の街道です。東糀谷3-4-1の交差点に石碑が建てられています。



明治時代に入ると、東京湾岸の開発が進み、呑川の整備も始まりました。流れの直線化や堤防の構築が行われ、新呑川もその影響を受けました。このころ産業道路はまだ存在しませんが、既に現在の藤兵衛橋付近まで水路が存在しています。



大正・昭和になると上流にも住宅地がふえ、下流の糀谷地区も水田がなくなり、住宅や工場ができればはじめました。大雨が降ると上流では田畑に浸透していた水が少なくなり「どぶ」(下水)を伝わって一気に呑川に流れ込みます。下流でも呑川に流れ込んでいたたくさんの支流(おもに六郷用水からの排水)の流れが集中することで、それまで以上に床上浸水が多くなり周辺住民の悩みの種でした。



新呑川の築造の進捗状況を昭和初期の航空写真を使って解説します。



昭和11年頃はまだ産業道路の呑川新橋付近(赤丸部分)までしか新呑川が存在していません。

1944年(昭和19年)

最終的に護岸の整備等が完了したのが昭和16年です。昭和19年の写真では分岐しているのがわかります。



平成以降、新呑川は地域の住民に親しまれる水辺環境に再生されつつあります。護岸や公園の再整備、環境保護活動や自然再生が進んで生き物の姿も以前に比べ多くみられるようになっています。



現在の新呑川(宝来橋から下流)



現在の大森南1丁目公園

【その他、呑川の豆知識】

・なぜ「呑む川」?

諸説ありますが名前は「牛」が由来という説も。呑川の名の由来は、江戸時代に「水がきれいでおしく、その水をウシが呑んだから」という説があります。また、新呑川を整備するきっかけにもなった大雨が降ると氾濫して水に呑まれるから呑川という説があります。

・新呑川を築造した際に出た土はどこへ?

昭和に入って本格的に工事が進められた際に掘り起こした大量の土は、当時土地が他より低く沼地に近い状態であった現在の北糀谷小学校付近に埋め立てることで、土地が高くなり(周辺の土地と標高が同等となり)水が溜まらないように土を有効活用したようです。

・新呑川の築造予定地に存在した神社は何処へ?

新呑川の築造予定地であった場所に諏訪神社が存在したため、子安八幡神社へ遷宮されました。初詣や盆踊り、秋祭りの際など、普段あまり意識されない方もいらっしゃると思いますが、子安八幡神社の中には諏訪神社の他、春日神社と末広稲荷が鎮座しています。

・ゴジラが上陸した川?

映画『シン・ゴジラ』で、ゴジラが東京湾から川を遡って蒲田に上陸したシーンのモデルは、新呑川です。